



令和6年1月に思うこと…

村山教育事務所 副所長(兼)総務課長 藤澤 義実

1 令和6年能登半島地震について

元日に発生した「令和6年能登半島地震」は、マグニチュード7.6最大震度7で甚大な被害をもたらしました。この地震によりお亡くなりになられた方々に深く哀悼の意を表するとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災された皆様の安全と一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

2 定期健康診断「精密検査」の受診について

さて、令和5年度の定期健康診断の結果はいかがでしたか。このたび、所内業務の関係で教職員の精密検査受診率を確認する機会があり、その際、毎年1割程度の方々が未受診のままの状態にあることが分かりました。

日々の忙しさや、受診スケジュールの確保が難しいことなど、これまで、受診できなかったことについて、それぞれ何らかの理由があるとは思いますが、まだ、精密検査を受けていない場合は、できる限り早く受診をお願いします。

もし、精密検査を受診しないまま、体調を崩して学校での勤務が難しい状況となった場合には、単に自分自身の問題にとどまらず、家族はもとより学校及び児童生徒にも直接の影響を与えることとなります。

参考までに、定期健康診断における精密検査受診率（県全体）は以下のとおりとなっています。市町村立学校の教職員の皆さんは、県の知事部局の職員に比較すると受診率が下回る傾向にあるようです。

《定期健康診断結果》

精密検査受診率（県全体）	R3 年度	R4 年度	備考
市町村立学校 【a】	89.3%	90.4%	県教育局福利厚生課
知事部局 【b】	96.8%	96.2%	県総務部総務厚生課
【a-b】	▲7.5%	▲5.8%	

3 今後の対応について

改めてのお願いとなりますが、定期健康診断で、要治療・要精検に該当した場合は、必ず精密検査を受診してください。まだ、精密検査を受けていない場合は、なるべく早く受診をお願いします。

各学校においては、受診状況を再度確認いただくとともに、未受診者に対して精密検査の受診をお勧めください。なお、職員会議での校長先生や教頭先生からの呼びかけや、教職員間調整のサポートなど、特段のご配慮をお願いします。

学校・地域の連携・協働による人づくり・地域づくり

馬場祐次朗氏（全国視聴覚教育連盟会長、全国体験活動ボランティア活動総合推進センターコーディネーター）より、学校・家庭・地域の連携・協働の必要性や学びを通じた人づくり・地域づくりについて講話をいただきました。馬場氏の説得力ある言葉から、参加者は今後の取組みに向けて展望をもつことができました。

研修① 講話「学校・地域の連携・協働による人づくり・地域づくり」

- ・学校教育と同様に、社会教育に携わる人々も「人づくり」の観点を忘れてはいけません。
- ・学校教育と社会教育が役割分担をしながら、子供も大人も学び合い育ち合う教育体制を構築していくことが重要である。
- ・社会教育主事、社会教育士をはじめ、これからの社会教育指導者に求められるのは、住民をやる気にさせ、時には焚きつけるファシリテーション能力であり、それを向上させることである。



研修② グループワーク「これからの学校教育と社会教育の連携・協働を考える」

グループワークでは「これからの学校教育と社会教育の連携・協働を考えるうえで重要なことは何か？」をテーマに研修内容を深く掘り下げました。

ワーク① 学校教育と社会教育が連携・協働するうえで“壁”となっていることは!?

コミュニティ・スクールや働き方改革の取組みに対して意識や評価がズレていたり、共有する場がなかったりするよね。

連携・協働は大切だけど、そのための場、時間の設定が難しい。教育課程にも連携・協働する余裕がないこともある。

取組みを牽引していた校長先生や先生方が異動してしまう。地域では、住民、保護者同士が顔を合わせる機会が限られ、つながりが希薄化している。



ワーク② 壁を乗り越え、学びを通じた「人づくり」「つながりづくり」のためにできることは!?

つなげる人（地域コーディネーター）、つながる場（コミュニティ・ルーム）、つなげる情報（SNS 等で発信）が重要だね。

やりがいや楽しさを共有したり、講座や研修の機会を設けたり、学校、地域の人々が話し、知り合い、つながることが大切だ。

子供を中心に据えて活動を考えること、とにかくやってみること、できるところから少しずつ、でも確実に。



【参加者の声】

- ・社会教育と学校教育の壁があることは感じているが、言葉にして交流することでさらに考えが深まり、その解決方法を考えることができた。教職員の忙しさ、その上で地域とつながっていくためには、その間の人、組織が必要であることが新たにわかった。
- ・子供たちは「将来、地域をつくる人」であることを改めて認識することができた。社会教育と学校教育の相互理解、子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築等、大切な視点を学ぶことができた。
- ・推進員に綿密な計画を練って打診しなければならなかったと思っていたが、推進員からすると「ある程度余白をもたせてもらったほうが案が広がりやすい」と話してもらったので、連絡調整役として推進員の方を捉えるのではなく、協働で授業を考えてくれる人として捉えようと感じました。

「学びに向かう集団をつくる教師力・学校力 ―特別活動などを活用して―」

本研修会は、小・中学校、幼稚園・認定こども園の先生等、校種を超えてたくさんの方々に参加いただき、國學院大學人間開発学部初等教育学科 教授 杉田洋氏より御講義いただきました。

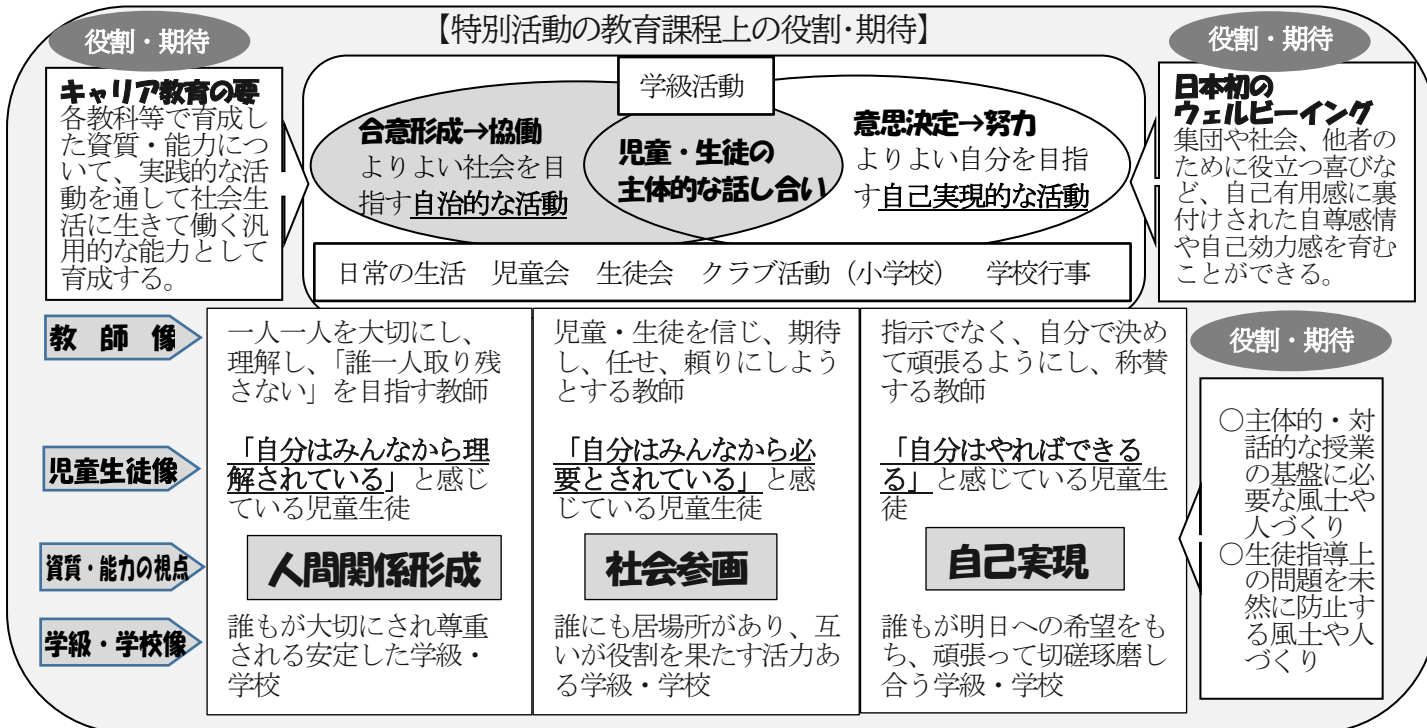
講義を通して、教育課程における「特別活動」を充実させていくことにより、学級の中で失敗しても許される環境や友達の発言を支える風土をつくり、自己有用感に裏付けされた自尊感情や自己効力感を育むことができることを教えていただきました。また、集団や自己の生活上の課題を解決していく際に、教師が介入した方が早いように思われる場面でも、児童生徒を信頼して任せることで、自分たちで解決する過程をとって児童生徒の自治的能力や自己指導能力、自己実現の力を高めることができることを改めて学ぶことができました。

「自立した学習者」の育成を目指し、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の観点からの授業改善を推進していくためには、児童生徒一人一人のよさや可能性が活かされる安全・安心な風土を醸成していくことが欠かせません。「特別活動」を活用するとともに、教科等の学習とも指導を往還させ、一人一人が安心して学びに向かうことのできる集団をつくっていききたいものです。

<講義資料より>



國學院大學 人間開発学部初等教育学科 教授 杉田 洋氏



【講義を受けて実践していきたいこと】～参加者より～

- ・子供が自己決定するチャンスを摘まないよう、待ちの姿勢を身に付けたい。
- ・「何をやるのか」ではなく「何のためにやるのか」を共有し、できるところから実践していきたい。
- ・競争や連帯責任で集団づくりをしていないか、集団によって個が否定されていないかどうかを自身自身に問いかけていきたい。
- ・中学校では、特別活動の内容が決まっていることが多く時間の確保が難しい。学年で特別活動の目的を理解したうえで取組みを見直していきたい。
- ・生徒の自主性の尊重と教師の介入のバランスが重要だと感じた。生徒主体の学級活動を実践し、学校運営の中に取り入れていきたい。

第2回 教育相談関係研修会

各市町で教育相談活動に御尽力いただいているの方々にお集まりいただき、教育相談活動等の一層の充実を図ることを目的に標記の研修会を行いました。

「特別な配慮が必要な不登校傾向の児童生徒への接し方について」

エリアスクールソーシャルワーカー 貴田 忍



応用行動分析の視点からの「ABC教育」

「ABC教育」のAは「先行刺激(例:「きちんと話を聞きましょう」等の指示等)」、Bは「行動」、Cは「後続刺激」のこと。対応した行動を褒められるといった「良き強化」の経験がなければ行動反応は弱化する。子供の行動を褒める・認めるという「後続刺激」を即座に与えることが効力感・肯定感を高める。

「不登校児童生徒に係る家庭支援及び関係機関との連携について」

エリアスクールソーシャルワーカー 高橋 啓二



それぞれの不登校ケースに応じた連携の強化

公的相談支援機関や民間支援機関(県教育委員会「不登校児童生徒の相談支援ガイド」参照)といった関係機関と一緒に、「チーム学校」として「どうしたら子どもの困った状態を変えられるか」を常に考えて支援することが重要。「保護者VS学校」という対立関係に陥らないようSSWを活用してほしい。

参加者から

- ・行動をほめることの大切さを再確認しました。ほめた後について「こうするともっといいよ。」などと言ってしまいがちです。できたことを少しずつ積み重ねることを大切にしたいと思いました。
- ・不登校児童に対する関わりの中で大切なのは、諦めないこと。小さな支援で大きく変わることもあると分かりました。多方面から様々な支援ができるよう、勉強しながら努めてまいりたいと思います。

授業の広場

～算数・数学の授業の充実に向けた実践紹介～

河北町立谷地中部小学校 第6学年

単元：データの調べ方

単元を通して、データの分析内容を根拠として結論を判断する力や、その妥当性について批判的に考察する力を付けることをねらいとして授業を行いました。

ポイント 単元構成

総合的な学習の時間に「河北町の未来」について児童が探究しており、探究の過程の「整理・分析」を算数の授業とつなげています。算数の授業では、河北町の人口や農業等のデータから未来を予想すること、そのために必要な知識及び技能を習得していくことを単元の1時間目に児童と共通理解しています。また、統計的探究プロセス(問題-計画-データ-分析-結論)を意識し、毎時間、根拠を基に結論を出させるようにしています。さらに、「相談タイム」で互いの考えを交流する場や、「つっこみタイム」で結論や問題解決の過程の妥当性等を検討する場を設定しています。



児童は、代表値や柱状グラフ等を用いて結論を出してきたため、本時でも既習事項を用いて結論を出すことができました。また、平均値や中央値が根拠としてふさわしくないことに気付いたり、他のデータの分析を参考に自分の考えを再検討したりと、既習事項を単元で活用することを通して学びを深めている児童の姿が見られました。



授業者は、「数字が教えてくれること」に着目するよう児童に伝え、根拠が曖昧であれば問い返し、児童の考えが確かなものになるよう支援していました。「数字が教えてくれること」は何か気付く児童生徒を育成するため、算数・数学の授業で教師は何をすべきかを具体的に考えていきましょう。